

# エミリー・ローズ

2006(平成18)年1月13日鑑賞(試写会・ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督・脚本＝スコット・デリクソン／出演＝ローラ・リニー／トム・ウィルキンソン／キャンベル・スコット／コルム・フィオール／ジェニファー・カーペンター／メアリー・ベス・ハート／ショーレ・アグダシュル／ジョシュア・クロズ／ケネス・ウェルシュ／ダンカン・フレイザー／ヘンリー・ツェーニー（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2005年アメリカ映画／120分）

……ムーア神父の手による悪魔祓いの儀式によって19歳の少女が死亡。神父は過失致死罪で起訴された。そんな実話にもとづき展開される本格的法廷ドラマは、迫力満点！ 敏腕女性弁護士の反論のポイントは、「悪魔の存在」の可能性。しかし、法廷でそんな審理がホントにできるの……？ そして、判決の行方は……？ 法科大学院の教材として推薦したい第一級映画の登場だ。

## 悪魔祓いの儀式とは？

「実話にもとづいたもの」というのがこの映画の1つの「売り」。ところで、この映画を鑑賞するについて私が最初にしたい質問は、「あなたは悪魔の存在を信じますか？」ということ。なぜならその答えによって、この映画への興味を持ち方が大きく異なるはずだから。次にこの悪魔の存在を前提とした上で、興味深いのが悪魔祓いの儀式。

この映画では、「悪魔祓いのすべてが録音されたテープは、現実に存在していた」ということだし、そのテープがこの映画の法廷シーンで「公開」されるから、十分注目しなければ……。さらにパンフレットには「悪魔の存在」とともに「全世界を震撼させた、“悪魔祓い裁判”のその後」について、さまざまな解説がされているので、これにも要注目。

さて、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世が3度行ったとパンフレットに書かれて

いる悪魔祓いの儀式をムーア神父（トム・ウィルキンソン）が行ったのはなぜ？  
そしてその手続は？

法曹界を目指すあなたが、仮にこのムーア神父の弁護人に就任するとすれば、  
まずはこの悪魔の勉強と悪魔祓いの勉強をすることが不可欠だよ……。

## 悪魔が入り込むタイプは……？

悪魔と弁護士をセットとして扱った映画に『ディアボロス・悪魔の扉』（97年）  
があったが、一般的に、悪魔が入りこむのは女性と相場が決まっている。それは  
女性の方が男性よりも感覚が鋭いから……？

この映画では、エリン・ブルナー（ローラ・リニー）弁護士が捜し求めてやっ  
とたどりついたアダニ博士（ショーレ・アグダシュルー）が、「エミリーは神経  
過敏症のために悪魔に取り憑かれていた可能性があり、また発作の薬を服用して  
いたせいで、ムーア神父が施した悪魔祓いも失敗した」と証言するが、その説明  
には十分な説得力があるのでは……？

## エミリー役は大変！

悪魔に取り憑かれた19歳の女性エミリー・ローズ（ジェニファー・カーペンタ  
ー）は、奨学金試験に合格したため、タダで大学に行けることになったことを喜び、  
真面目に勉強している女子大生。なぜ、悪魔はこんな健気な女性の体内に入り  
こむのかと文句を言いたくなるが、それは事実だから（？）仕方なし。

悪魔に取り憑かれたエミリーは、そりゃ大変。幻覚・幻聴をはじめとして、激  
しい痙攣と筋肉硬直、そして見開かれた瞳孔とその口から出てくる悪魔の声  
……？ こんなしんどい役（？）を見事に熱演するのが、新人女優のジェニファ  
ー・カーペンター。今後期待大だが、少し残念なのは私好みの美人顔ではないこ  
と……？

## 弁護人選任の裏表……？

ムーア神父の悪魔祓いの儀式による少女の死亡、そんな事件を引き受けても弁  
護士としては、ヘンに傷つくことはあっても何の出世にも結びつかない。そう考

えるのが、アメリカの普通の弁護士。まして、死刑確実な凶悪犯の事件を無罪に導き、腕利き女性弁護士という評判をとっているエリンにとっては、これは基本的にやりたくない事件。

エリンが所属する事務所の大切な顧客がカトリック教会、そしてエリンの上司がカール・ガンダーソン（コルム・フィオール）。そして、カールは何よりも顧客の満足に価値をおく典型的なアメリカの弁護士だったから、カトリック教会に傷をつけないように、このムーア神父の事件を処理するのが第一義と考えたのは当然。そこで、カールが白羽の矢を立てたのがエリンだが、さてエリンはその要請を受けるのだろうか……？

## エリンが弁護人を引き受けた動機は？

エリンは結局、弁護人を引き受けることになったが、その動機は自分の事務所内における「出世」のため。すなわち、上司のカールからこの事件で「司法取引」を成立させ、カトリック教会にダメージを与えない形で解決することができれば、一層出世することができると誘われたからだ。

そこでエリンが弁護人就任を承諾するについて出した要求は、「シニアパートナーにしてくれ」とまでは言わないが、「私の名前をあなたの次に並べること」というものだった。

カールがあっさりとこの要求を了解したため、エリンはムーア神父の弁護人となったわけだが、弁護士法1条の「基本的人権の擁護と社会正義の実現」を常に意識している私のような人権派・社会派(?) 弁護士の目には、これは少し違和感があるもの。しかし、あくまでこれがアメリカ流……。

## エリン弁護士の出世と良心との衝突 その1

そんなエリンだったが、ムーア神父は検察官との司法取引を断固拒否し、仮釈放できない境遇もスンナリと受け入れたから、たちまちここでエリンの弁護方針と「対立」することに。刑事事件においては、弁護人と被告人との信頼関係が不可欠だから、弁護方針が食い違うことは最悪。そこでエリンが考えたのは、ムーア神父を無罪にすること。司法取引に応じるようムーア神父を説得して、カトリ

ック教会を傷つけないようにするのも1つの方法だが、ムーア神父を無罪にすることができれば、それは予想以上の成果であり、当然エリン弁護士の評判をさらに高めることができる……。自信家で野心家のエリンがそう考えたのは、ある意味当然だったかも……。

## エリン弁護士の出世と良心との衝突 その2

審理が進む中、ムーア神父は悪魔祓いの儀式を施す中でエミリーの身に実際におきたことを法廷で証言するのが彼女のためであり、自分の義務だという信念をエリンに訴えた。しかし、エリンがこのムーア神父の証言を逡巡したのは弁護士として当然のこと。なぜなら、その証言によって確実に無罪になるのならともかく、悪魔祓いの儀式に関するその証言が広く報道されればカトリック教会が傷つく可能性が高いからだ。カトリック教会やカール弁護士の意向に反して、ムーア神父を証言させれば、自分の出世にも響いてくる。そんな出世と良心の衝突の中、エリンが選んだ結論は？

## 法廷は証人尋問が華

法廷は証人尋問が華。したがって、現職の弁護士である私がこの映画の法廷ドラマとしての証人尋問の面白さを評論していけば、かなり詳細なものにならざるをえないが、それは法科大学院用の教科書を出版する時に譲るとし、ここではポイントだけ触れることにしたい。

まず、証人調べを実施する前提として大切なことは、争点の整理と立証趣旨の明確化。検察側の主張は、ムーア神父による悪魔祓いの儀式の後のエミリーの死亡は自然死ではなく、これは医学上適切な治療をさせなかったムーア神父の責任だというもの。

したがって、「検察側の証人」となるのは、①ヴォーゲル医師、②ミュラー博士（ケネス・ウェルシュ）、③ブリッグズ博士（ヘンリー・ツェーニー）で、これらの専門家の証言によって、ほぼムーア神父の有罪性は立証できているもの。もちろんエリン弁護士は懸命の反対尋問を試みているが、残念ながら主尋問の結果を覆すのは到底ムリ……。

## 弁護側の方針とその展開は？

このままでは敗色濃厚。冷静に現局面を判断したエリン弁護士には、どうしても検察側とは違う視点からの専門家の証言が必要だった。そこでやっと捜しあてたのが、アダニ博士で、博士による前述の証言はそれなりに価値のあるもの。しかしこの映画最大のポイントは、悪魔祓いの儀式に立ち会っていたというムーア神父の友人である精神科医のカートライト（ダンカン・フレイザー）の動向。その存在を隠していたムーア神父をエリンはなじったが、「秘密にしておく」という2人の約束だったからと説明されると、それ以上は非難できず……。

しかしこのカートライトから証言の確約をとりつけたエリン弁護士は勇気百倍で、ムーア神父の無罪を確信したが……？

これ以上の評論は避け、あとは各自スクリーン上で展開される手に汗握る闘いに注視してもらいたいものだ。

## 父親とボーイフレンドの証言の有効性は……？

エミリーが悪魔祓いの儀式を受ける前に再三幻覚・幻聴に襲われ、異常な行動をとっていたことは争いのない事実。そしてそのためエミリーは大学病院で診察を受け、処方箋にしたがって薬も常飲していたことも争いのない事実。そんな症状に苦しむエミリーを心配していたのが、家族やエミリーのボーイフレンドのジェイソン（ジョシュア・クローズ）だった。エリン弁護士はこのエミリーの父親やジェイソンを証人申請し、エミリーに悪魔が取り憑いていたことを立証しようとしたが……？

## 録音テープの証拠調べの方法は……？

この映画では、悪魔祓いの儀式の有り様をムーア神父が録音し、カートライト博士がもっていたという録音テープそのものが証拠として採用され、証言台に座ったムーア神父の手によってそれが法廷で再生される。

日本の法廷では、通常録音テープは反訳して書証として提出されるため、法廷で再生されることはまずない。もっとも、目下日経新聞朝刊で連載されている渡

辺淳一原作の『愛の流刑地』では、「愛を交わしている最中」を録音したテープが証拠として採用され、傍聴人を排除した状態でその証拠調べ（再生）がなされている様子が詳細に描かれていたが、それは例外……？ さて、この映画ではその録音テープが再生されたことは、陪審員の心証にどのような影響を与えるのだろうか？

## 13日の金曜日に見る2つの弁護士像—ちょっとプライベートなお話も……

私が悪魔祓いをめぐる本格的法廷ドラマであるこの『エミリー・ローズ』を観たのが、たまたま13日の金曜日という不吉な日だったのも、何かの偶然。そして、たまたまこの日、坂和総合法律事務所を経営している弁護士の私にとって、弁護士の事件に対する責任感や意欲という点について、大いに感じる事が重なったので、それをあえてこの映画評論の中で書いておきたい。

この映画の主人公を1人選べば、それはやはりエリン弁護士。その能力の高さは自他共に認めるところだが、それ以上に私が注目したいのは、弁護士としての責任感と事件に取り組む意欲。

それに対比して、この13日の金曜日にわが坂和総合法律事務所が発生したのが、昨年（2005年）10月に入所した新人弁護士の退職。登録直後からどんな事件でもきちんと処理できるとは毛頭思っていないが、新人弁護士として最低限必要なものは、責任感と意欲。ところがわが事務所の新人弁護士は、「書けない」「しゃべれない」「整理できない」という三重苦。そのため、難しい書面作成や証人尋問などは到底ムリ。

したがって、日常的なルーティンワークについても、「電話メモが取れない」「依頼者からの事情聴取ができない」「預かった事件の資料の整理ができない」という有り様。そして、それを指摘して一層の奮起を求めても、その反応は鈍く、「ハイ、ハイ」と答えるだけ。

そして挙げ句の果てに「今日で辞めます」ときたから、その社会人としての思慮・分別のなさにもビックリ。

大量の弁護士が粗製乱造されている昨今、「落ちこぼれ弁護士」の出現が徐々に増えているが、今後それが急激に増大するであろうことは、この一件をみても

明らか。司法研修所には「二回試験」という制度があり、一定数はいわゆる「落第」としているが、もっと厳格にその試験を実施しなければ、姉齒建築士問題で揺れる建築士の世界と同じように、弁護士の世界もヤバくなるのでは……？

そんな、責任感と意欲のない新人弁護士に対して、他の研修はやめて、何よりも優先して観せたいのがこの映画におけるエリン弁護士の姿。その爪の垢でも煎じて飲めば少しは変身できるかも……？

## 教材としたいエリン弁護士の最終弁論

証人尋問が法廷の華なら、弁護人の最終弁論はいわば弁護士の独演会！ したがって、その独演会に12名の陪審員の目をどこまで釘付けにできるか、そしてまたそのしゃべっている内容をどこまで納得させられるかは、100%その弁護士の力量にかかるもの。しかし、日本の刑事裁判の実態をみれば、事前に用意した弁論要旨をそのまま棒読みにするのはまだましな方で、その場しのぎのどってつけたような弁論、あるいは逆に、毎回同じパターンで使い回している弁論がほとんど……？

裁判官の顔を見ながら、堂々と口頭で弁論をする弁護士の姿などめったにお目にかかれるものではなく、こんな状態で2009年5月から裁判員制度がホントに施行されたらお寒い限りというのが弁護士の実態……？

したがって法科大学院はもとより、日本の（新人）弁護士研修の教材としたいのが、このエリン弁護士の最終弁論。

その狙いの第1は、起訴事実については疑いをいれないまでの立証責任があくまで検察側にあるという当然の理屈の強調。そして第2に、弁護側の弁護方針にすえた悪魔の存在について、必ずしも自分も悪魔の存在を確信しているわけではないと心情を吐露する一方、しかしあくまでその可能性は否定できないはずだと迫るもの。

その論旨や内容の充実ぶりもさることながら、彼女の「弁論術」のすばらしさにうっとりすること確実。もちろん、これは映画だからと言ってしまえばそれまでだが、こんな立派な教材を活かさない手はないのでは……？

## 検察庁も裁判所も是非この映画を……

私は弁護士の立場でこの映画を評論しているが、この映画を真に本格的な法廷ドラマに仕上げているのは、エリン弁護士だけではなく、敵対するイーサン・トマス検事（キャンベル・スコット）も優秀なため。冒頭陳述・証人尋問そして論告におけるトマス検事の追及の鋭さは、エリン弁護士と互角のものでこれぞ検察官の鑑といえるもの。

また、「悪魔の存否」などという通常、法廷では争点となりえない難しいこの事件の審理を実に手際よく進めていくのがブリュースター判事（メアリー・ベス・ハート）。えらく権力的な裁判官や逆に半分居眠りしている裁判官がチラホラ見える日本では、裁判所も是非この映画を教材として活用してもらいたいもの。そして、ここにはあえて書かないが、陪審員の評決を聞いた後のブリュースター判事の行動に大いに注目したいもの……。

## 運命の評決は？

検察官の論告と弁護人の弁論が終われば、12名の陪審員による評決が開始され、有罪・無罪の結論のメモが裁判長に対して手渡されるのが陪審裁判の手続。そして、密室における陪審員の評決の有り様を劇的に描いた傑作映画が『十二人の怒れる男』（57年）。

この「国民対ムーア神父」事件の陪審員たちも、特別な人ではなく無作為に抽出された12名の一般市民だから、こんな事件について、有罪・無罪を判断するのはきっと難しかったはず。この映画はこの点については結論だけにしぼっているから、その議論がもめたのかどうか、またその評決に何日を要したのかなどについては全く触れないまま。それはともかく、その注目の評決は……？

2006(平成18)年1月14日記